

## 1. 研究背景

### 1-1. 学校博物館に関する動向と課題

近年、少子化により我が国では多くの小学校で余裕教室が増加傾向にあり、若年世帯の地域定住の希薄化や地域存続の観点から、それらを有効活用し地域利用することへの関心が高まっている。その中で、地域資料や学校史等の歴史民俗系資料を保存・展示する学校博物館が出現している。横浜市においては、2013 年から横浜市歴史博物館主導で展開される「博物館デビュー支援事業<sup>1)</sup>」により、学校博物館が現在までに 33 か所整備されている (2020.千葉)。

しかし、整備後数年の各学校博物館の活動を調査すると、現在における学校博物館は、授業以外の目的で継続的かつ有効に活用されているとは言い難い。そこで地域利用の観点から、もう一度学校博物館の存在意義を見直し、今後の有効な活用法を模索することが求められている。

### 1-2. 地域回想法に関する動向と課題

近年、介護予防や認知症緩和・予防に有効とされる回想法<sup>2)</sup>が普及している。我が国では特別養護老人ホームや老人福祉施設(以下、福祉施設等)において臨床的に導入され、その効果が実証されている (2010.津田)。中でも、地域資源を回想法へ活用する「地域回想法」が注目され、先行事例として愛知県北名古屋市師勝町では、博物館や地域の社会資源を回想空間として活用し、誰もが回想法を享受できる仕組みを構築している。このような博物館における回想法は、介護や認知症予防のみならず、民俗学的調査、世代間交流促進等の、様々な相乗効果が期待でき、特に地方都市における小規模な博物館への回想法導入が求められている。(2013.鳴瀬)

## 2. 研究目的

本研究は、前述した学校博物館の新たな活用法の可能性の模索及び小規模な博物館における回想法導入契機の高まりから、横浜市 S 小学校学校博物館 (以下、SM) において回想法を試行し、学校博物館における回想法の可能性を捉えようとするものである。更に SM の他に、我が国の一般的な回想法現場である福祉施設等に類する横浜市 K 地域ケアプラザ<sup>3)</sup> (以下、KC) において、SM 同様に回想法を実施する。両施設における回想法試行時の比較から、回想空間の違いによる回想者の行動特性と、SM の展示効果と回想法の関係性を明らかにすることで、回想空間としての学校博物館の意義を捉え、学校博物館を核とした新たな地域回想法の在り方を考察することを目的とする。

## 3. 調査概要

本研究では、SM 及び KC の 2 つの異なる空間で回想法を実施し、SM 組 6 名と KC 組 6 名を対象に、約 1 時間の回想法実施中の行動観察調査 (発話回数や発話内容、ジェスチャーや表情など) 及び、回想法運営団体に対する回想法実施後の対象者の評価、並びに回想空間に関するヒアリング調査を行った。また、SM 組では、鑑賞行動と回想法の関連性を調査するため、回想法実施前に鑑賞を 30 分行ってもらい、その行動観察調査を追加で行った。SM・KC はともに横浜市保土ヶ谷区上菅田地域に位置する施設で、両施設の基本情報は表 1 の通りである。また、対象者・回想法運営団体の基本情報については表 2 に示す。

表 1 調査対象館の基本情報

| 調査対象館    | 横浜市 S 小学校学校博物館 (SM)    | 横浜市 K 地域ケアプラザ (KC)  |
|----------|------------------------|---------------------|
| 展示の有無    | 有                      | 無                   |
| 使用する回想道具 | SM 内の展示品 (実物)          | 写真 (SM 内の展示品を撮影し作成) |
| 回想空間の特徴  | 展示室、教室 2 室分 (約 7×20 m) | ケアルーム (約 7×10 m)    |
| 立地条件     | 小学校コミュニティハウス棟          | 地域ケアプラザ (福祉施設内)     |

Study on the reminiscence project for the elderly in local school museum - A trial of the reminiscences in S School Museum in Yokohama -

Taichi CHIBA, (Supervisor: Prof. Kazuoki OHARA, Assoc Prof. Yasuhiro FUJIOKA)

Keyword's : school museum, local reminiscence therapy, elderly with dementia

表2 調査の基本情報

| 調査対象館  | 横浜市 S 小学校学校博物館 (SM)  | 横浜市 K 地域ケアプラザ (KC)   |
|--------|--|--|
| 調査時間   | 2021 年 12 月 19 日 10:30~12:00   | 2021 年 12 月 19 日 14:00~15:00   |
| 調査対象者  | A さん (80 代女性/ミニデイサービス利用者/B さんの妻)<br>B さん (80 代男性/ミニデイサービス利用者/A さんの夫)<br>C さん (80 代女性/介護保険サービス利用者)<br>D さん (80 代女性/介護保険サービス利用者)<br>E さん (80 代女性/ボランティア)<br>F さん (80 代女性/ボランティア) | A さん (60 代男性/介護保険サービス利用者)<br>B さん (80 代女性/ボランティア)<br>C さん (80 代女性/ボランティア)<br>D さん (80 代女性/ボランティア)<br>E さん (70 代女性/ボランティア)<br>F さん (80 代女性/介護保険サービス利用者) |
| 回想法運営者 | よこはま回想法倶楽部   | よこはま回想法倶楽部   |

### 3-1. 調査手法

#### (1)回想法実施中の行動観察調査

回想空間の違いによる、発話回数、振る舞い方、表情、視線等の時間変化を比較するため、SM組・KC組回想法実施中の対象者の行動を、5分間隔で計1時間(5分×12回)記録した。

#### (2)展示鑑賞行動の観察調査

展示空間での鑑賞行動と回想法実施中の回想内容の関連性を調査するため、SMにおいて対象者6名の鑑賞動線や発話内容、行為等を約30分間記録した。

#### (3)回想法運営主体による対象者の評価

回想法終了時に、回想法運営主体に対して①グループへの参加意欲、②回想内容の発展性、③回想、発言内容の質、④対人(集団)コミュニケーション、⑤喜び、楽しみなどの満足度の5項目について、参加者個別の状況を4点から1点までの4件法で評価し、算出された得点の変化で評価した。

### 3-2. 調査の流れ

SM・KC組の参加者及び記録者の配置関係を図1に示す。SM・KC組共に使用する回想道具は、子どもの頃のお手伝いを連想させる資料として炭火式アイロン、洗濯板、羽釜とし、SMでは実物、KCでは写真

を用意した。また記録者は対象者の視界になるべく入らないよう注意した。

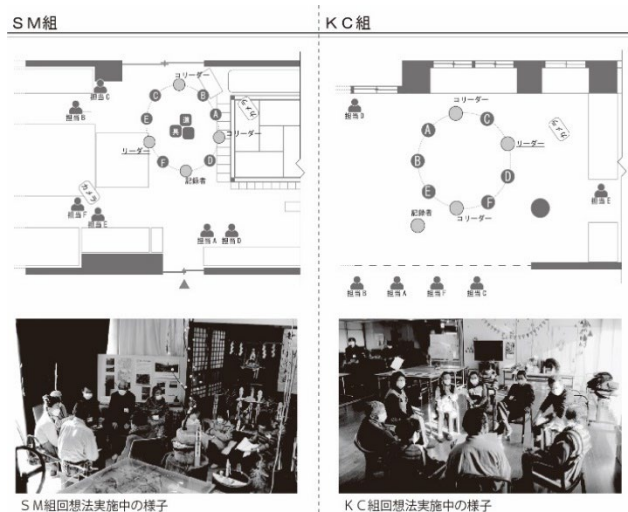


図1 SM・KCの調査当日の参加者・記録者の配置

## 4. 回想空間の違いによる行動特性と効果測定

### 4-1. 発話回数の特徴

SM・KC組における発話総数の時間推移を図2に示す。図2における発話総数の内訳は自発発言回数と促し発言回数の合計であり、前者は個人を特定して発言したのではなく自ら進んで発言した発言、後者は個人を特定して質問した問いかけに対して発言した発言とした。またSM・KC組の発話総数の自発発言・促し発言の構成比は、SM組 83.7%・17.3%、KC組 78.5%・21.5%であり、共に自発発言回数が8割前後の高い数値を示した。

5分間隔における発話者の構成を見ると、SM組は各対象者満遍なく発言しているのに対し、KC組では発話者の構成に偏りがみられる。KC組14:25~14:50のグラフでは、Cさんの発話回数が全体の8割を占めている。KC組では、回想道具の写真に対して、知っている若しくは思い出のある人が中心となって話が

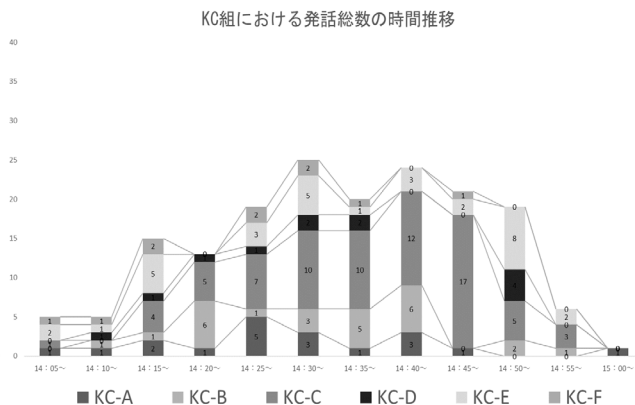
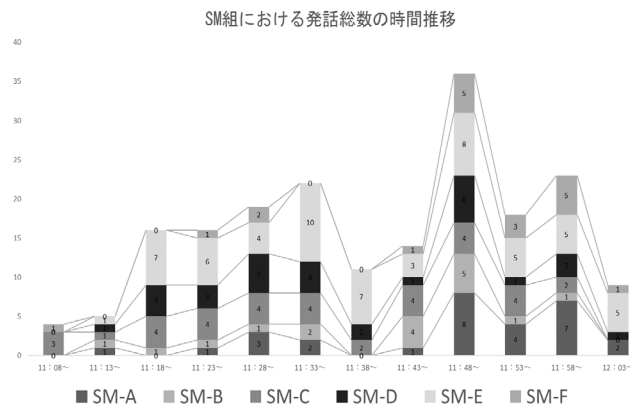


図2 SM・KC組における発話総数の時間推移

進められる一方で、回想道具に関して知らない若しくは思い出がない人は話に参加できず消極的になってしまうためである。対してSM組では、回想道具に触れることや周囲の展示空間を見渡す等の行動から、発言に至るといったシーンが多々見られた。故に、各対象者の発言を均等に促すためには、予め用意した回想道具だけではなく、展示室のような環境の設定が効果的だと考える。

#### 4-2. 回想空間の違いによる回想法の特徴 (図3)

回想法実施中に出てきた話題を5分間隔で集計し、その時間的推移を分析した。SMのような展示空間では、回想道具の話題→展示空間にあるものの話題→回想道具の話題という流れが出来、回想道具により想起された記憶が、展示空間と関連付けられ更なる記憶の想起に繋がることが分かった。対して、KCでは、提示された回想道具の写真に対する発言が主となり、その話題が終わり次第次の道具の写真に話題がシフトされる。故に、福祉施設等における写真を用いた回想法は、一度提示した回想道具に再度戻って回想するという状況が生まれにくく、一方向の回想となってしまう可能性があるかと推察する。

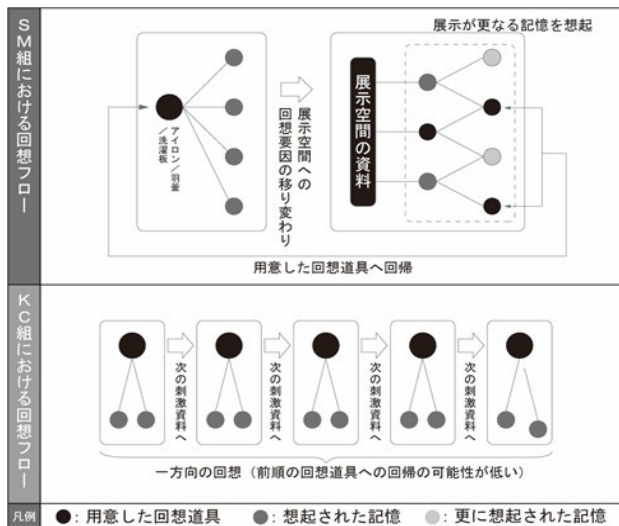


図3 SM・KC組の回想フローの特徴

以上より、SMでは用意した回想道具から展示空間へと回想対象が移り変わり、再度用意した回想道具へと回帰するという好循環が生まれることが分かり、周囲の環境から刺激される機会が豊富であるSMのような展示空間においては、本来思い出してもらいたい回想テーマについて回帰する機会が多いことから、より深い回想が期待できると考える。

#### 4-3. 回想法運営主体による対象者の観察調査

回想法運営主体から見た、SM・KC組の各対象者の観察評価結果について表3に示す。

表3 回想法運営主体の観察調査結果

|            | SM-A | SM-B | SM-C | SM組の平均得点 |
|------------|------|------|------|----------|
| SM組の観察評価結果 |      |      |      |          |
|            | SM-D | SM-E | SM-F |          |
|            | KC-A | KC-B | KC-C |          |
| KC組の観察評価結果 |      |      |      |          |
|            | KC-D | KC-E | KC-F |          |

SM・KC組各対象者の5項目における点数の平均値をとったところ、①、④、⑤項目については、両施設ほとんど変化は見られなかった。しかし、②回想内容の発展性、③回想、発言内容の質については、SM組がKC組よりも②+0.53点、③+0.83点となり、回想法運営者からみた対象者の回想度合いを示す得点はSM組が高い値を示す結果となった。

#### 5. 鑑賞行動が回想法に及ぼす影響

SMにおける展示鑑賞については、SMボランティアスタッフが各対象者につき1人説明役として1人付く鑑賞形式とし、対象者がより深く展示を理解しながら鑑賞できるよう工夫した。

##### 5-1. 鑑賞行動中の回想

30分間の鑑賞における各対象者の鑑賞行動中の、①回想発現をした回数、②道具の使い方について自ら説明された回数、③懐かしそうな態度を示した回数について、調査員6名による観察記録と録画記録によって各項目の総数を集計した結果、30分間のうち①8回、②2回、③5回の計15回の回想的発言・行為が観察された(表4)。

表4 展示鑑賞中の回想的行為の集計

|            | SM-A | SM-B | SM-C | SM-D | SM-E | SM-F | 合計 |
|------------|------|------|------|------|------|------|----|
| 回想発言回数     | 3    | 2    | 1    | 1    | 0    | 1    | 8  |
| 回想道具の使い方説明 | 0    | 0    | 0    | 0    | 0    | 2    | 2  |
| 懐かしむ態度     | 0    | 0    | 2    | 2    | 0    | 1    | 5  |

##### 5-2. 鑑賞行動と回想法実施中の回想内容との関連

以下、回想法中のSM組対象者の展示空間に関連す

る発言行為に関して2つのケースが観察された。

#### ケース(1)：SM内の特定の展示品を見る又は指差しながらの発言するケース

ケース(1)は、鑑賞中に記憶した展示物やその展示箇所を特定して発言する行為であり、SM組対象者においてAさんを除く全ての対象者でケース(1)が確認された。以上より、鑑賞行動中の記憶は回想法実施中の対象者の回想を促す要素であると推察する。

#### ケース(2)：用意した回想道具以外のSM内の展示物に関して発言するケース

ケース(2)は、無意識のうちに展示空間内の展示物について発言する行為であり、Dさん及びEさんにおいて観察された。Dさんが発言した展示品をD'(古びた麻雀牌)、Eさんが発言した展示品をE'(手動回転式洗濯機)とし、2人の展示鑑賞行動の観察調査記録と照合すると、DさんはD'の展示箇所に約1分の間昔懐かしむ発言をしながら立ち止まって鑑賞し、EさんはE'の展示箇所に約2.5分間立ち止まってじっくり鑑賞していることが観察された。

以上より、回想を伴った鑑賞行為や展示品を深くじっくり鑑賞する行為は、回想法実施中にそれらの記憶が無意識のうちに引き出され、回想者の回想材料となり得る可能性があるかと推察する。

### 6. 回想空間としての学校博物館の評価

回想法運営者に対して行った、SM・KCの回想空間の評価に関するヒアリング結果を以下にまとめる。

#### (1)懐古的空間が持つ場の力

SM・KC組の各対象者の回想内容を比較すると、SM組対象者の方が回想内容に深まりがあったという回答が得られた。一般的な回想法は、KCのような普通空間において写真や道具などの刺激資料を用いて実施するケースが多いが、本研究で試行したSMのような懐古的展示空間で行う回想法は、場自体が刺激材料となり、回想の深まりや回想への導入のしやすさに有効であることが分かった。

#### (2)学校博物館に求められる回想空間

SMは、回想法を実施する上では多少窮屈であるという回答が得られた。学校博物館は主として学校教育への活用を目的としているため、児童が一時的に集まることができるスペースが計画されている。しかし、整備後そのようなスペースの面積は減少しつつある。

これは、学校博物館関係者の熱量に比例して、資料の収集・展示が増えているためである。SMにおいても展示物の増加に伴い収蔵スペースが不足し資料を展示する他なくなったため、新設当初計画されていたフリースペースが、現在は展示スペースとなっている。動作を伴わない回想法においても回想空間の広さが重要となることから、今後の学校教育への活用も視野に入れた適切なレイアウト計画を検討する必要がある。

### 7. 学校博物館を活用した地域回想法の可能性

本研究では、学校博物館において試行的に回想法を導入し、普通空間におけるそれと比較しながら学校博物館における回想法の可能性を調査した。調査結果より、懐古的展示空間が回想者の深い回想を引き出すことや回想への導入のしやすさに繋がること、展示鑑賞行動自体が回想的意味を持つこと、展示鑑賞後に行う回想法が回想者の記憶を引き出す手助けになることが分かり、学校博物館の回想空間としての有効性が確認された。しかし、本研究においては回想法の学校博物館における試行であり、今後学校博物館を活用した地域回想法を実現するためには、①回想法運営主体—学校博物館関係者—地域の福祉施設等間の連携強化、②回想空間としての適切な広さの検討が必要だと考える。更に、小学校内にあることを活かした、道具を使った経験のある高齢者が子供達に説明できるような世代間交流を促す仕組みづくりも大切である。以上の点に留意することで、誰もが回想法を享受できる学校博物館ならではの地域回想法が確立されると推察する。

最後に本研究では、各対象者1回のみでの回想法体験であったが、本来は継続的な回想法を実施することによりその効果が得られるものであるため、回想法の継続試行とその評価を今後の課題としたい。

1) 2013年から始まる横浜市歴史博物館主導のものと行われる、小学校に元来保管されていた歴史民俗系の資料の再整理と資料室整備事業のこと。現在は終了。

2) 懐古的なモノを見たりそれに触れたりしながら、昔の経験や思い出を語り合う一種の心理療法。1960年代にアメリカの精神科医、ロバート・バトラー氏が提唱し、認知症の方へのアプローチとして注目される。

3) 誰もが地域で安心して暮らせるよう、身近な福祉・保健の拠点としてさまざまな取組を行う、横浜市独自の施設。令和3年4月時点で横浜市内に141か所。

[参考文献]

1. 空間条件から見た学校博物館に関する研究 横浜市立小学校における歴史民俗系の活動を事例とした考察、千葉汰一、pp1329-1330、2020年09月

2. 特別養護老人ホームにおける回想法の実践—多層ベースラインでの介入効果—、津田理恵子、神戸女子大学健康福祉学部紀要、No2、pp19~29、2010年

3. シニア世代と若者世代の文化伝播を円滑にするための新たなシステムの構築にむけて—、鳴瀬麻子、人間生活文化研究報告書、No23、pp242~245、2013年

[謝辞]

本研究を進めるにあたり、S小学校学校博物館館長及び回想法団体、横浜市K地域ケアプラザ、回想法参加者の方々等、多くの皆様に調査のご協力を頂きました。ここに感謝の意を表し、厚く御礼申し上げます。